

# 新・グローバル時代の英語教育

—新学習指導要領に対応した英語科教育法—

岡 秀夫 編著

飯野 厚      稲垣 善律      金澤 洋子  
祁答院 恵古      小泉 仁      富永 裕子 著

 **SEIBIDO**

## まえがき

2020 年はいろいろな意味で歴史に残る年になりそうです。一つには「東京オリンピック・パラリンピック」という世界的なイベントが日本で開催されます。また、学校教育においては、2014 年 12 月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、それ以来議論されてきた新しい「学習指導要領」が、いよいよ 2020 年 4 月から順次実施されます。

時が経つのは早いもので、最初の東京オリンピックが開催されたのは 1964 年、私が大学に入学した年でした。その年に東海道新幹線が開通し、日本が世界の先進国の仲間入りをしました。それを機に、「英会話」や「役に立つ英語」というようなブームを呼び起こしました。その後、日本は 1970～80 年代に大きな経済成長を遂げ、海外進出や国際交流が進むのに伴い英語の必要性も高まり、「帰国子女」ということばも生まれました。

21 世紀に入ると、2002 年に「英語が使える日本人」構想が登場し、国際化に伴い「グローバル人材」が求められるようになりました。その結果、英語の必要性もただ単に日常会話だけでなく、生きた力として「使える英語力」が求められるようになってきました。英語を社内公用語とする企業も現れ、2011 年度には小学校に英語が導入され、“SELHI”に代表されるような英語教育の先進的な取り組み、英語でのイマージョン・プログラム、さらには国際バカロレア認定校、というような新しいものが次々に登場してきました。このように、時代はどんどん国際化の方に動いています。

本書は、2020 年度から実施される新しい学習指導要領に合わせて（小学校 2020 年度、中学校 2021 年度、高等学校 2022 年度）、将来英語の教員をめざす人たちのための「英語科教育法」のテキストです。前回の拙書（成美堂 2011）以後、さまざまな変化がありました。とりわけ、小学校英語の面で著しい進展が見られ、CEFR や CLIL というような新しい用語が飛び交い、「英語の授業は英語で」と謳われ、大学入試の英語 4 技能をめぐる議論が盛んになってきています。そのような変化や進展を取り入れて、本書は世界の言語事情と言語習得、英語の知識と技能、およびその指導と評価に関して 12 章にわたって扱います。

英語教師は“夢を運ぶプロフェッション”です。「英語」は皆さんの世界と視野を広げてくれる夢のふくらむ教科です。世界に飛び立ち、さまざまな人々と接し、異文化と交わることができるのです。そのような夢を次の世代になう生徒たちにも伝えて下さい。立派な教員をめざして夢と情熱を持って取り組み、英語教育における専門性を養って下さい。本書がその手助けになれば幸いです。

本書は、私、岡が中心になり、小学校や中学・高校で教鞭をとった経験を持ち、大学院で英語教育学を専攻し、今は大学で英語や英語科教育法を担当している方々とチームを組んで作成しました。それぞれの章の担当に関しては、下記の一覧表をご覧ください

い。しかし、どの章も誰もで読み返し、意見交換しながら書き換えたりしましたので、本書全体は7人の共同作業の成果であると言えます。

各章の構成に関しては、授業で使いやすく効果的に展開できるよう心がけました。まず、各章の初めに「イントロダクション」を掲げ、これから勉強しようとする内容を簡潔に紹介し、学生の関心を高めます。次に「Keywords」でその章に出てくる重要な用語をまとめました。これは復習にも利用できます。本文の最後には「研究課題」を設け、ただ理解するだけでなく、それをもとにさらに調べたり、発表したりアクティブに活動できるよう工夫しました。

本書は、主に大学の学部レベルでの「英語科教育法」のテキストとして作りしましたが、それ以外にも、現職の小学校、中学校、高等学校の先生方、またこの分野に関心をお持ちの大学の先生や大学院生の方々などにも参考になるよう、わかりやすい説明と具体的な事例を心がけました。広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の出版にあたっては、成美堂の佐野英一郎社長、および編集の萩原美奈子氏に大変お世話になりました。紙面を借りて心より感謝申し上げます。

2019年 新しい「令和」の時代を迎えて

岡 秀夫

### 執筆者・担当一覧

|       |                      |            |
|-------|----------------------|------------|
| 岡秀夫   | 金沢学院大学教授・東京大学名誉教授    | 1, 2 章     |
| 飯野厚   | 法政大学教授               | 7, 9 章     |
| 稲垣善律  | 津田塾大学准教授             | 4, 8 章     |
| 金澤洋子  | 聖心女子大学教授             | 3, 6 章     |
| 祁答院恵古 | 法政大学兼任講師・小学校英語アドバイザー | 12 章       |
| 小泉仁   | 東京家政大学教授             | 5, 11 章    |
| 富永裕子  | 清泉女学院大学准教授           | 6, 8, 10 章 |

# || CONTENTS ||

|                  |     |
|------------------|-----|
| まえがき，執筆者・担当一覧    | i   |
| 第 1 章 世界の中の英語    | 1   |
| 第 2 章 第二言語習得     | 14  |
| 第 3 章 外国語教授法     | 25  |
| 第 4 章 学習者        | 46  |
| 第 5 章 学習指導要領     | 64  |
| 第 6 章 言語要素の指導    | 79  |
| 第 7 章 4 技能の活動    | 103 |
| 第 8 章 授業展開       | 131 |
| 第 9 章 教材・教具      | 152 |
| 第 10 章 テストと評価    | 168 |
| 第 11 章 教員養成と教員研修 | 185 |
| 第 12 章 小学校英語     | 196 |
| 巻末付録資料           | 213 |
| 参考文献             | 221 |
| 索引               | 225 |

# 世界の中の英語

## Keywords

- ## 1. 世界の言語



1



図1 スイスの言語地図

いる（出典：連邦統計局，2014）。そのような多言語状況では，小学校の中学年から隣接する地域の言語を，中学校から英語を学び<sup>2)</sup>，誰もが多言語話者になる。

もう一つ興味深いのは，言語によって母語話者の数が大きく違う点である。驚くべきことに，トップ10の言語で世界人口の半数を占めている。逆に，母語話者が10万人未満の言語は全体のほぼ7

割，5千を超え，消滅の危機にさらされた言語もある（アイヌ語もその一つ）。話者数の多い順に中国語（13億人），英語（3.8億人），その次にスペイン語，ヒンディー語，アラビア語と続き，日本語は1.3億人で9位に位置する。話者数においては中国語がトップを占めるが，その広がりやビジネスや科学技術等における影響力が大きいのは圧倒的に英語で，今や世界の共通語としての役割を持つ。英語は単にイギリス，アメリカだけでなく，カナダやオーストラリア，さらにアジアではインドやシンガポール，アフリカではケニアやガーナなど，2014年現在，合計58の国で公用語となっている。

インド，シンガポールの言語事情はその歴史，社会と密接に関連している。両国ともイギリスの植民地であったため，植民地政策の一環として宗主国の言語である英語が統治言語として用いられていた。インドでは800以上の言語が話されているが，植民地時代の名残で今も英語は公用語である。それと同時に，独立後の民族意識の高まりから，連邦政府レベルでの公用語はヒンディー語で，英語は準公用語とされている。また，シンガポールの場合，中国人（74%），マレー人（13%），インド人（9%）と多民族国家であることを反映して，母語もそれぞれ，マンダリン，マレー語，タミル語と分かれている。1965年独立国家となった時，特定の言語を選ぶとそれ以外の民族からの反発が強いため，「3言語＋英語」という形で4つの公用語が制定された。英語はどの民族からも等距離にあるので不公平感がない，という国家統一のためであった。

最近のヨーロッパの動向は注目に値する。ヨーロッパは1993年にEU（European Union：欧州連合）として統一され，2019年時点で28カ国からなり，24の言語が公用語として認定されている。経済面では「ユーロ」（€）で統一されたが，言語・文化に関しては「統一の中の多様性」をキャッチフレーズに，それぞれの独自性を尊重している。24言語のうち，英語とフランス語が作業言語として使われる。そうすると，どう

▷▷—————◁◁

2) 最近チューリッヒでは，小学校2年から英語を，5年からフランス語を学ぶ。これに対してはフランス語圏から猛反発がある。

ということが起こるか面白い。例えば、マルタ語で演説があると、まず英語、フランス語、ドイツ語の主要言語に訳され、そこからギリシャ語とかチェコ語などへと訳されていくのである。これは「リレー通訳方式」と呼ばれるやり方である。

EUの言語政策で注目すべきは「3言語主義」である。つまり、21世紀のヨーロッパ市民として、母語の他に近隣国の言語と国際コミュニケーションのための言語、合わせて3つの言語の運用力を持つことが目標とされる。しっかりした母語能力に加えて、さらに2つの言語を必要に応じて使うことができる「複言語主義」(plurilingualism)をめざすのである(吉島他 2004)<sup>3)</sup>。

## 2. 英語の広がり

### 2.1 英語の歴史

ここでは、英語がどのようにして今日のような広がりを持つに至ったのか、その歴史を探る。

もともと大ブリテン島にはケルト語を話すケルト人が住んでいたが、4世紀末に民族大移動で北ドイツからアングロ・サクソンが押し寄せ、ケルト人はスコットランドやアイルランドに追いやられた。そのアングロ・サクソンが話していた“Angles”からEnglishと呼ばれるようになった。英語史では「古英語」(Old English : 700-1150)の後、「中英語」(Middle English : 1150-1500)を迎える。ここでの大きな出来事は1066年のノルマン征服である。フランス語を話すノルマンディー公ウィリアムが英国の王位を継承し、多くのノルマン人が移住してきた。その結果、その後200年間はフランス語が社会的・文化的に優位を占め、英語は一般庶民のことばにとどまった。この時期にフランス語から驚くべき数の語彙が入ってきた。例えば、料理 (beef, pork, salad), ファッション (dress, fashion, petticoat), 芸術 (art, beauty, blue), 政治・宗教 (peace, liberty, cathedral) など、その数は1万語とも言われる。中でも面白いのは、生きた豚はアングロ・サクソン語でpigだが、食用の肉になるとフランス語から来たporkになる。

その後、「近代英語」(Modern English : 1500-1900)の時代に入るとシェイクスピア(W. Shakespeare)が登場し、多くの作品を英語で世に出し、英語が広がった。また、聖書はそれまでラテン語でしか存在しなかったが、ジェームズ1世の命で英語版『欽定訳聖書』(1611)が世に出され、一般の人々にとって話しことばでしかなかった英語に市民権が与えられた。

英語が世界的な広がりを見せるきっかけになったのは、1620年に清教徒(Pilgrim Fathers)が大西洋を渡り、1776年にアメリカ合衆国13州が独立を宣言したことにあ

---

▷◁

3) 「複言語」(plurilingual)は「多言語」(multilingual)とは違い、一人の個人の中に複数の言語が存在する状態を指す。



る。アメリカ社会の中核をなしたのは“WASP”（White Anglo Saxon Protestant の頭文字語）と呼ばれる人たちで、そこでの共通語は英語であった。英語の歴史にとって重大な意味を持つのは、ウェブスター（N. Webster）の辞書 *Dictionary of the English Language*（1828）である。複雑な英国式綴りを簡略化し、発音に近づけるように改良したのである。例えば、colour → color, centre → center, realise → realize, programme → program などである。これが規範となり、アメリカ英語として確立された。面白いのはイギリスの「プログラム」の綴りで、普通のプログラムの場合は伝統的な綴りを用いるのに対して、コンピューターのソフトになるとアメリカ式の綴りを使う。英語の逆輸入である。

20 世紀になると「現代英語」（Present-day English:1900-）の時代となり、英語がますます広がりを見せる。「太陽の沈まない国」と謳われた大英帝国、とりわけヴィクトリア朝時代の栄華、および第二次世界大戦後のアメリカの政治・経済力の影響で英語は世界中に広がり、今日では世界の共通語と言っても過言ではない。マスコミ、科学技術などあらゆる分野で国際語として圧倒的な強さを持つ。科学技術の分野では 2008 年に 82 % に及び、ネットでは世界標準言語になっている。

## 2.2 世界の英語

今や、英語は世界中に広がりを見せている。そうすると、英語を使う人たちもさまざまで、一様ではない。カチル（Kachru 1985）は世界の英語話者を次のように 3 つのグループに分類した。

図 2 に見るように、同心円の中心から、内円、外円、拡大円の 3 つで表される。一番中心の「内円」に来るのがネイティブ・スピーカー（native speaker：母語話者）である。その周りの「外円」に来るのは、英語を第二言語（English as a second language：ESL）として習得し、公用語として使用する人たちである。前節で述べたインドやシンガポールの人々がこれに当たる。そして、一番外側の「拡大円」には、英語

を外国語（English as a foreign language：EFL）として学習し、国際コミュニケーションで使う人たちが含まれる。国連人口基金の調査によると、世界人口は 2015 年に 73 億人と推計され、そのうち英語人口は 17.5 億人で、その内訳は母語話者 3.8 億人、非母語話者（ESL と EFL を含む）13.7 億人である。ということは、驚くことに 4 人に一人は英語を使っていることになる。しかもその大部分は母語話者ではない。

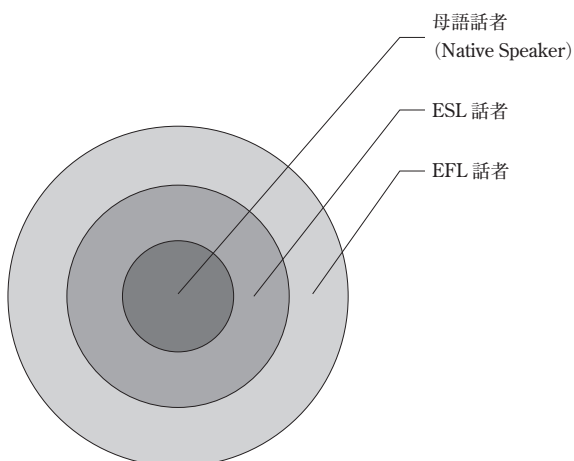


図 2 英語の広がり (Kachru 1985 をもとに)



そのような広がりや裏では、当然ながら、英語の多様化、つまり地域的な差異も進んできている。英語を母語とする国の中でも地域差は大きい。例えば、[r] の癖の強いスコットランドなまりや、母音を引き延ばす drawl に代表されるアメリカの南部なまりは著しく、オーストラリア英語では [ei] が [ai] と発音される。また、ESL の国でもインド英語では [θ] の発音が [t] になったりするし、さらに EFL の国々ではそれぞれの母語に影響され、地域差はさまざまで、そのため “World Englishes” と呼ばれたりする。そのような状況を反映して、英語教育では従来ネイティブ・スピーカーを規範にしてきたが、今日では English as a lingua franca (ELF) としてノン・ネイティブ中心のとらえ方によって来た。ひと昔前には、標準英語として、イギリス英語では R. P. (Received Pronunciation: 容認発音)<sup>4)</sup>、アメリカ英語では中西部で話される General American が規範とされ、学習者はそれらをモデルとして練習を積んだ。最早そのような規範的なアプローチは影を潜め、多様性を認める傾向が強い。しかし、どんな発音でもいいというわけではなく、一定の基準がある。その基準になるのが intelligibility、つまり国際コミュニケーションにおいて相互理解できることが条件になる。例えば、日本人は [θ] の発音が母語にないため [s] で代用することが多いが、そうすると think が sink になってしまい、溺れてしまうことになる。[θ] と [s] は英語では全く違う音素 (phoneme)<sup>5)</sup>であって、意味の違いをもたらす。それゆえ、この区別は重大で、代用パターンにも国際ルールがある。[θ] の発音はネイティブの子どもにも難しく習得が一番遅れ、いまだ母語習得の道程にいる子どもは [f] や [t] で代用する。

### 3. 英語の多様性

### 3.1 英語の地域的変異：イギリス英語とアメリカ英語

英語にいろいろな地域的な違いがある中で、代表的なイギリス英語とアメリカ英語を対比させてみよう。

4) R.P. は教養のある人の話す英語を指し、別名 Queen's English, BBC English, Oxford English と呼ばれる。

5) 「音素」は意味の違いをもたらす音の最小単位。言語によって異なり、英語では [r] と [l] は別の音素で right と light は全く別物だが、日本語では「ライト」で一つ。

表1 イギリス英語とアメリカ英語 (岡 2018)

|          |                                                                                                                                                                                                                              |
|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 発音が異なるもの | ask : [á:sk] – [æ(:)sk] / can't : [ká:nt] – [kæ(:)nt] / car : [ká:] – [ká:r] / hot : [hót] – [hát]                                                                                                                           |
| 綴りが異なるもの | colour – color / theatre – theater / realise – realize / travelling – traveling / programme – program                                                                                                                        |
| 単語が異なるもの | エレベーター : lift – elevator / アパート : flat – apartment / 地下鉄 : underground – subway / 秋 : autumn – fall / 行列 : queue – line / ガソリンスタンド : petrol station – gas station / サッカー : football – soccer / ごみ : rubbish – garbage, trash |
| 意味が異なるもの | first floor : 2階 – 1階 / pants : 下着 – ズボン / potato chips : 日本で言うフレンチフライ (ポテトチップのことはイギリスでは crisps と言う) – 袋に入って売られているポテトチップ                                                                                                     |
| 語法が異なるもの | got – gotten / Have you (got) ~? (所有の意味で) – Do you have ~? / I shall go – I will go / 1st May, 2018 – May 1st, 2018 (1/5/18 – 5/1/18)                                                                                        |

※ペアで示しているものは初めがイギリス英語で、後がアメリカ英語

### 3.2 時代による変化：最近の英語の特徴

上の2.1で英語の歴史を概観したが、ここでは最近の英語に焦点を当て、その特徴を見てみたい。中でも一番顕著なのは、社会の変化が反映されている点である。最近の社会変化の大きな特徴は、伝統や形式など堅苦しさから解放されて、社会全体がインフォーマル化し、カジュアル化傾向にある点と言えよう。典型的には服装にそれがよく表れている。このような社会的変化の発端になったのが1960年代の「ヒッピー」(hippies)に代表される若者の反乱である。“Hello!”と言う人が少なくなり“Hi!”が一般的になり、“Yes!”の代わりに“Yeah!”と言う人が増えた。最近の会話を聞くと you know を差し挟む人が多い。さらにアメリカでは first name の使用が増え、大学で教授を first name で呼ぶこともある。

最近の英語の特徴と変化について、単語、文法、綴りに分けて見ていこう。

#### (1) 単語

社会の変化を映し出した最も特徴的なのは、PC (political correctness) である。PCとは「社会的に弱者に対する差別・偏見のないことば」を指し、対象は女性、身体障害者、虐げられた民族などである。この発端は60年代のアメリカでの公民権運動にある。“Black is beautiful!”のスローガンのもと、黒人に対する差別が攻撃され、Negro が Black に変わり、さらに最近では肌の色も差別的とされ、African-American というハイフオン付き用語が用いられる。日系人の場合も Jap から Japanese-American になった。

女性に対する差別反対運動は、70-80年代の Women's liberation (ウーマン・リブ：女性解放) 運動であった。-man のつく語が排斥され、chairman は chairperson または chair に、policeman は police officer になった。代名詞の使い方でも、以前は teacher を受けるのは he であったのが、男女同格に he/she と表記され、“he or she”と読む。今や小学校の先生の場合、女性が圧倒的に多いので she で受けることが多くなっている。

身体障害者に関する表現は、deaf (つんば) はもはや死語で、hard of hearing とか

hearing-impaired (難聴, 聴覚障害) と表される。また, ユーフェミズム (婉曲表現) も用いられる。日本語でも「年寄り」ではなく「熟年」と遠回しに言うように, 英語でも senior citizen が一般的になった。

時代の変化とともに新造語も生まれてきている。典型的なのが, 日本のサラリーマンをもじった“workaholic”である。これは work+alcoholic の合成から生まれ, 「アル中」ならぬ「仕事中毒」という意味で, 悪いニュアンスを持つ。このように, 英語が国際語になった背景には, こうした新造語を許容しながら他の言語からいろいろな単語を取り込んで豊かになっていることがある。日本語からの借用語として, 昔は geisha, harakiri がよく知られていたが, 最近では manga, tsunami などが広く用いられるようになってきている。

## (2) 文法

文法面ではそれほど変化は見られないが, 「補語の位置に来るのは主格でなければならない」というラテン語文法に基づいた It's I. という表現から, It's me. が一般的な用法になっている。また, 現在でも everybody, nobody を受けるのに they が用いられたり, 用法に揺れがある。一例を上げれば, Nobody is happy about the situation, are they? という具合である。

## (3) 綴り

綴りに関しては, ウェブスターの辞書 (1828) で話しことばに近い綴りが導入され, アメリカ英語として定着したが, さらにその傾向が進んでいる。看板に “Monday thru Friday” とあったり, 漫画で “This is cos ~” というような表記が見られる<sup>6)</sup>。

綴りの面で大きな影響を与えているのはメールである。スペースと時間の節約のためか, 次のような表記が頻繁に見受けられる。4U, CU l8ter, asap, BTW などである<sup>7)</sup>。また, Please e-mail me. とか I'll google it for you. というような新しい表現も使われるようになってきた。

### 3.3 社会言語学的多様性

実際にことばを使う場合, 重要になってくるのは文法的な正確さ (correctness) だけでなく, 社会的な適切さ (appropriateness) を無視できない。いわゆる TPO により場面や相手にふさわしいことば使いが求められ, 文法的に正しくても, 社会的に適切でないと誤解を生んだり, 相手の感情を傷つけたりし, コミュニケーションに支障をきたす。そのような言語使用の社会的側面をとらえるための枠組みが register (言語使用

▷▷—————◁◁

6) through, because の略。because [bikáz/bikáz:] の場合, くだけた口調では強勢のため [ká:z/káz:] と聞こえるので, それに合わせて cos と表記するのである。

7) それぞれ for you, see you later, as soon as possible, by the way の略。



- 4 Can you lend me this book, (please) ?
- 5 Could you lend me this book, (please) ?
- 6 I wonder if you could lend me this book.
- 7 I was wondering if you could lend me this book.

## 4. 日本の英語教育

### 4.1 日本の言語環境

「第二言語としての英語」(ESL) という呼び名は、母語としての英語と大雑把に区別する用語で、ネイティブ・スピーカーに対して「ノン・ネイティブ」(non-native speaker: NNS) の人たち全ての英語を含む。ところが、2.2 のカチルの「英語の広がり」でも見たように、NNS でもシンガポールのような ESL 環境と日本のような EFL 環境では質的に異なり、その違いは重要な意味合いを持つ。最も根本的な違いは英語の持つ社会的役割で、ESL では英語がまわりの社会で使われ、実際のニーズがあるのに対

表 2 ESL と EFL の比較

|       | ESL                                                                       | EFL                                  |
|-------|---------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------|
| 学習環境  | まわりに豊富なインプット、アウトプットの機会がある。英語使用を求める社会的圧力のもとで習得する。                          | インプット、アウトプットの機会は限定される。学校の一教科として学習する。 |
| 学習時期  | 子どもの場合は、母語の学習により子どもの中に基本的な概念体系が形成されつつある時期に学習されるため、概念体系、社会的態度の発達とより深く結びつく。 | 母語習得の過程が一応完了した時点で、学習が開始される。          |
| 目的    | 学習者の社会的統合と社会的要請の充足という社会的性格を持つ。                                            | 学習者の視野の拡大という教育的性格を持つ。                |
| 話しことば | 目標言語が実際に話しことばとして使用されている現実があり、重視される。                                       | 意識的に強調する必要がある。擬似コミュニケーション練習になりがちである。 |
| 語彙学習  | 使用される場面、事物との直接連合による。                                                      | 母語との対比において学ぶ。                        |
| 言語規範  | 英語国で話されている形ではなく、現地で実際に使われている形が規範となる。                                      | 世界的に標準化された形の目標言語が規範となる。              |

▷▷ ————— ◁◁

9) 1 は、please がついてはいるものの、命令文が示すように命令口調なので、丁寧さは落ちる。2 は依頼の用件が相手にとって当然すべき義務であるような時（目上から目下の者へ）に使われ、3 はもう少し丁寧に、業務用として用を頼む時（客から店員に対して）に用いられる。4 と 5 は押しつけがましくない態度でものを頼むことになる。つまり、2, 3 が「してくれるつもりですか」と問うのに対して、4, 5 は「できる立場にありますか」とやんわり尋ねる。4 は親しい間柄で informal, 5 は最低限の礼儀をつくす気持ちで使われる。そして、6, 7 はさらに控えめな態度でものを頼む表現になる。つまり、私が思っているだけであって、「してくれ」と頼んでいるわけではないのだが、という気持ちを表す。とりわけ、過去形だと「～だと思ったのですが」と、さらに間接的で遠慮がちに響くので丁寧さが増す。

して、EFLでは英語が学校の一教科にとどまり、教室外での社会的なニーズはない。そのため、英語教育・学習の目的や目標も大きく違ってくる。ESLでは実践的な運用力が重視されるのに対して、EFLでは教養・文化的側面が重んじられ、外国語学習を通しての知的・教育的価値を無視することはできない。ESLとEFLの違いを比較すると、前ページの表2のようにまとめることができよう。

## 4.2 ESLの英語

ESLの国で英語が公用語として使われる国は、アジアではインド、シンガポール、アフリカではケニア、ガーナ、ナイジェリア、それ以外にフィジーやプエルトリコなど世界中に広がりを見せている。シンガポールの場合、1965年の独立に際し3つの民族言語（マンダリン、マレー語、タミル語）に加えて、国家の統一のために英語は第4の公用語に制定された。その後、1980年の新教育制度で英語がますます強調されるようになり、1987年には全ての学校で英語が教育言語となった。英語ができなければ大学進学もできず、社会的成功はおぼつかない。そのようにESLでは英語が広く使われる反面、誰もが日常的に使うため母語の訛りが強くなる。“Singlish”と呼ばれる地元訛りの強い英語の広がりを懸念して、2000年から“Speak Good English”運動が展開されている<sup>10)</sup>。

## 4.3 EFLの教育制度

世界にEFLの国は少なくない。アジアでは日本をはじめ韓国や中国など、ヨーロッパではほとんどの国で英語はEFLとして教えられている。ところが、その教育制度は一律ではない。国際比較をしてみると、学習時間、学習開始年齢、クラスサイズ、教育言語などの面で違いが見られる。

まず、TOEFL (Test of English as a Foreign Language) の得点結果をもとに英語力を比較してみると、被験者の数や質において違いがあるので統計的には厳密性を欠くかもしれないものの、デンマークやオランダなどヨーロッパの国々が上位を占める。ヨーロッパの国々は言語的な距離が近く、地理的、歴史的にも有利であると言えるかもしれないが、一つの指標としてこのテスト結果が示唆するところは大きい。アジアに限って2017年の報告書を見ると、上位はシンガポールやインドが占め、日本は36カ国中、下から2番目という悲慘な結果である。

お隣の韓国では英語教育に対して非常に積極的な取り組みが見られる。日本に先駆けて1994年に大学入試にリスニング・テストが導入され（日本は2006年）、1997年には小学校で英語が必修科目となり、今や3-4年では週2時間、5-6年では週3時間とな

▷▷—————◁◁

10) Singlishの特徴は、発音面での訛りのほか、中国語からの影響で終助詞“lah”が頻発される。例えば、“Ok, lah.”というような表現がよく聞かれる。



っている（日本では、2011年から5・6年で外国語活動の一つとして週に1コマ導入されている<sup>11)</sup>）。

教育制度の中で、中学、高校レベルにおける英語の時間数に関しては、ドイツとフィンランドがやや多い以外、それほどの違いは見られない（大谷 1999）。日本と比べて目立つ点は、学習開始年齢が早い点である。従来もほとんどの国で10歳から、つまり小学校5年生位から英語が導入されていたが、最近ではそれが早期化し、3年生から開始するのが一般的になり（韓国、フィンランド、チェコなど）、中には1年生から始める国も少なくない（中国、イタリア、スペイン、ポーランドなど）。

このように英語導入の低年齢化が、英語のインプットの量を増す一つの要因となるが、それに加えて英語力の伸びに影響を与えるのは、クラスサイズと教育言語である。一クラスの人数が少なければより手厚い指導が可能になり、英語を使って授業をすればインプットの量が増える。英語教育に関して驚くべきことは、日本の常識が世界的には必ずしも通用しない点である。特に、一クラスに35～40人もいたり、授業のほとんどが日本語で行われていることは、世界の常識に反する。20人以上では生きたことばの教育は不可能だと外国の人は考える。また、いまだに日本語を使って文法訳読式の授業が行われていることは、ヨーロッパの国々におけるラテン語などの古典語教育に相当し、現代語の教育ではあり得ないと言う。現代語を教えるにはその目標言語を使って教えるのが当たり前になっているからである<sup>12)</sup>。

#### 4.4 日本の英語教育のめざすもの

日本では英語教育の目的に関して、これまで「実用か教養か？」という二分法で論議が進められてきたが、それでは問題は解決しない。2者択一ではなく、EFL環境であることと、世界において日本の置かれた状況を考え合わせると、実用面と教養面をいかに融合させるかが課題になる。Rivers (1964: 天満訳 1987) は、外国語学習の目的を次のページの表3のように6つに分類した。

資料としてはやや古いかも知れないが、これらの目的は包括的で、普遍的な価値を持つ。これらの6つの要素が基本となり、社会と時代のニーズが変化するのに伴い、重点の置き方が多少変わってくるのである。同じEFLでもオランダと日本では社会的な諸条件が異なるので重点の置き方が異なろうし、また日本でも明治期と現在では社会の要求するものが大きく違ってくるのは当然であろう。英語が西洋の文明を吸収するためであった時代と、今や英語を介して世界とコミュニケーションすることが求められる時代との違いである。そのような変遷は、学習指導要領に表れた目標にも反映されることに

▷▷—————◁◁

11) 2020年からは3・4年で外国語活動、5・6年で教科としての英語が始まる（⇒第12章「小学校英語」を参照のこと）。

12) 現行の高等学校学習指導要領、そして新しい中学校学習指導要領で「授業は英語で行うことを基本とする」と明示されている（⇒第5章参照）。



表 3 外国語学習の目的

|                                                                                                                                                                                                                   |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ①知的能力を伸ばす<br>To develop the student's intellectual powers through foreign language study                                                                                                                          |
| ②偉大な文学に触れ個人的教養を広げる<br>To increase the student's personal culture through the study of the great culture and philosophy                                                                                            |
| ③言語の機能の理解を深め、母国語の理解をより深める<br>To increase the student's understanding of how language functions and to bring him to a greater awareness of the functions of his own language                                       |
| ④外国語で書かれたものを読んで新しい情報を摂取する態度を養う<br>To teach the student to read the foreign language with comprehension so that he may keep abreast of modern writing, research and information                                    |
| ⑤外国人の生活やものの考え方に対する共感的な見方を身につける<br>To bring the student to a greater understanding of people across national barriers by giving him a sympathetic insight into the ways of life and ways of thinking of the people |
| ⑥外国人と口頭あるいは文字を介してコミュニケーションできる<br>To provide the student with skills which will enable him to communicate orally, and to some degree in writing with the people of another language                                |

なる（⇒第 5 章 1 節参照）。

現在の日本における学校教育の一環としての英語教育では、これらの項目をバランスよく取り込むことが求められよう。つまり、技能面での目標（表 3 の 4, 6）に加えて、文化的な価値（2, 5）、教育的な意義（1, 3）を融合させることが大切になる。換言すれば、英語の技能を伸ばすと同時に、英語学習を通してことばや文化への認識を高め、学習者の全人的な成長に貢献するものとならなければならない。

最近、世界的な広がりを見せている CEFR（Common European Framework of Reference：ヨーロッパ共通参照枠）<sup>13)</sup>は、あらゆる言語学習に適用でき、世界基準になりつつある。その考え方は Can-Do 式に表記された能力記述文に表れているように、明らかに action-based（行動中心）な立場をとる。「ことばを使って何かができる」ことが求められており、knowledge-based つまり「何かを知っていること」だけで十分ではない。それがヨーロッパ市民の目標である「3 言語主義」（母語プラス 2）につながり、「部分的能力」（partial competence）を容認する態度に表れている。つまり、ネイティブ・スピーカーをめざす必要はなく、しっかりした母語の基盤を持った成人が、さらに第 2, 第 3 言語の能力も兼ね備え、相手と共有された言語によって文化差を乗り越えて意思疎通を図ることを想定している。CEFR の理念は表 3 で言うところの 1, 2, 3 をもとに、4, 6 で外国語を効果的に使い、5 の異文化理解を通して EU 諸国の平和共存を目標とする、という風にとらえることが出来よう。これが EU の言語・文化に関する「統

▷◁

13) 吉島他（2004）参照のこと。CEFR は 2001 年に欧州評議会（Council of Europe）が世に出したもので、言語能力を 4 技能 5 領域に分け、A1 ～ C2 の 6 段階で示している。

一の中の多様性」という理念なのである。

最近、日本では「グローバル人材」の必要性が叫ばれているが、ことばだけの問題ではない。英語ができるからと言って、則「グローバル人材」とはならない。CEFR がめざすのは完全なバイリンガルではなく、“**plurilingual**”（複言語）という用語で表される。「複言語」とは、**multilingual**（多言語）とは異なる。「多言語」は社会の中で複数の言語が並存している状態を言うのに対して、「複言語」は一人の個人の中に複数の言語が存在することを指す。つまり、しっかりした母語と教養に支えられ、必要に応じて機能させることがで

きる英語力を備えた日本人なのである。そのためには、しっかりした日本語の力を土台に、日本・世界に関する教養を備え、人間的にも豊かな人物であることが求められよう。それは、図3のような3重の円で図示できよう。

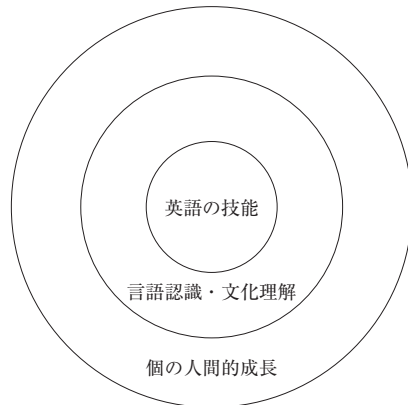


図3 英語教育の目的

### 研究課題

- (1) 世界にはどれくらいの言語がありますか。国の数と比較すると何がわかりますか。
- (2) 英語の広がりとの関連で、英語を使う人はどのように分類することが出来ますか。その中で、日本の英語学習者はどこに入りますか。
- (3) 実際に英語を使うとき、社会的な側面でどのようなことに注意する必要がありますか。具体的な例をあげて説明しなさい。